

校本『をられぬみづ』稿(三)

片山 享

をられぬ水 二の巻

秋歌

文治六年女御入内屏風に 後徳大寺左大臣

一五六 いつもきくふもとのさとゝおもへともきのふにかは

る山おろしの風(二八八)

¹ いつも聞とはふもとの里なれば山風のおとは常

に聞をいふ、山おろしのおとの昨日にかはるに

て秋をしれるよし也²

百首歌よみ侍りけるに 家隆卿²

一五七 きのふたにとはんと思ひし津の国の生田の杜に秋は

きにけり(二八九)

本歌、君すまはとはまし物をつの国のいく田の

〔学〕ナシ

1 いつも聞とはをいふ―いつもきくは常に風のおとを聞也(野・乙)

2 秋をしれるよしや也―秋になりしことをしれる也

(野・乙)

〔学〕君すまはとはましものをつの国のいく田の杜の

秋のはつ風、此本歌の詞をとりてとはんとはいへり、

とはんとおもひしはゆきてみんとおもひしにて昨日た

には秋ならぬきのふすらのこゝろなり

1 侍りけるに―侍りける中ニ(学)

2 家隆卿―家隆朝臣(学)

もりの秋のはつ風、立秋の日にむかへてきのふ
といへるにて昨日たには秋ならぬ時すらの意也
とはんとおもひしはきて見んと思ひしにて、生
田の杜に行ていへること也、いく田の「杜に秋
はきにけりといへるにてしか聞えたり

最勝四天王院障子に高砂かきたる所

秀能

一五八 ふく風のいろこそみえね高砂の尾への松に秋はき
にけり(二九〇)

¹ こそはこゝろのうらへかへるこそにて、² 二の
句は吹風のいろこそみえねおとは聞えてといふ
意也

百首歌奉りける時

俊成卿

一五九 ふしみ山松のかけよりみわたせはあくる田のものに秋
風そふく(二九一)

ふしみにふして¹みるをそへてふしたる松のかけ
よりみわたせは²のこゝろ也、あくるとあるにて

3 思ひしにて―思ひしといふ意にて(乙)

4 いへるにて―あるにて(野・乙)

(学) ナシ

1 こそは―此こそは(野) 二の句こそは(乙)

2 一二の句は―ナシ(野・乙)

3 聞えて―して(野)

(学) 伏見山に臥をそへたり、かりねをしたる松の
かけより見わたせはの意なり

1 ふしてみるをそへて―臥をかねて(野) ふして
みるをそへたり(乙)

2 あくるとあるにてしか聞ゆ―田のものは鳥羽田を
いふ(野) ナシ(乙)

しか聞ゆ

五十首歌に

家隆脚

一六〇 明ぬるか衣手さむし菅はらやふしみのさとの秋のは

つ風 (二九二)

三四五二とつゝけてみるへし¹、ふしみに

伏をそへてさむしといへるに感情あり、涼しと

いはんは世の常也

千五百番歌合に

撰政太政大臣¹

一六一 深草の露のよすかをちきりにて里をはかれす秋はき

にけり (二九三)

二三一四五とつゝけてみるへし、露のよすかは

露のより所にて、かれすはちきりもかれす也、

露のより所か縁になりて深草の里をは契もかれ

す秋⁴のくるといふ意也

通具脚

一六二 あはれ又いかにしのはん袖の露のはらの風に秋はき

にけり (二九四)

[学] ナシ

1 ふしみに伏をそへて―ナシ(野) ふしみに伏をそへたり(乙)(野は文の終りにある)

2 感情あり―感情深し(野)

[学] 露のよすかはつゆのより所にて、ちきりは縁な

り、家つとに露を秋のより所にする意なりといへるはたかへり、深草の露のよすかとあれは露のよすかは深也、一首の意はつゆのより所は深草か縁になりて里をはかれす秋はきにけりといへるなり

1 撰政太政大臣―撰政(野)

2 にて―にて草葉をいふ(野)

3 より所か―より所の草葉が

4 秋のくる―秋のきにけり(野・乙)

[学] ナシ

一四五二三とつゝけてみるへし、二三の句は袖
にかゝる涙をいかにしてしのはんのごゝろ也²

具親」

一六三 敷たへのまくらの上にすきぬ也露をたつぬる秋のは

つ風 (二九五)

四五二二三とつゝけてみるへし、露をたつねて
ちらす秋のはつ風か枕の上に吹きて又涙をこほ
すといふ意也

顕昭

一六四 みつくきの岡の葛はもいろつきてけさうらかなしあ

きのはつ風 (二九六)

みつくきは稚茎にて岡の枕詞なるを、岡の稚茎
の葛葉もの意を聞せたり、うらかなしはごゝろ
かなしにてくすの葉のうらかへりてかなしをそ
へたり

越前

一六五 秋はたごゝろよりおくゆふ露を袖の外ともおもひ

1 涙を―露を (野)

2 次に「野はらのはもしをわの如くよむへし、是は
しらへにかゝはること也」(野)

(学) ナシ

1 たつねてちらす―たつぬる (野)

2 又―我 (野)

(学) ナシ

1 なるを―なから (野)

2 意を聞せたり―意也 (野)

3 うらかなしは―そへたり―うらは心にて葛のうら
かへるをかねたり (野)

4 うらかへりてかなしを―うらかへるを (乙)

(学) ナシ

けるかな (二九七)

たゝはひたすらの意にて、夕露をのをもしはなる物をの意也、心よりおく夕露といひて涙なることをおもはせ、¹ 袖の外といひて草葉なることをきかせたり、秋はひたすら我心よりおく涙の夕露なる物を袖の外のくさ葉にのみおく物とおもひけることかなといふ意也

五十首歌奉りける時 雅経卿

一六六 きのみまでよそに忍ひし下荻の末葉の露に秋風そふく (二九八)

是は昨日まで下荻のよそに忍ひし秋風をけふ¹は末はの露にふくと詞を次第して、けふ²はといふことをそへてみるへし

題しらす 西行

一六七 おしなへて物をおもはぬ人にさへこゝろをつくる秋のはつかせ (二九九)

¹ 上句はものをおもはぬなへての人にまでこの

1 意にて、夕露を―意、三の句の(野)

(学) ナシ

- 1 けふは―ナシ(野)
- 2 けふはといふことをそへて―ナシ(野)

(学) ナシ

- 1 上句は―上句(野)
- 2 四の句―四の句は(乙) 四の句をそへてみるへし―ナシ(野)

一六八 あはれいかに草はの露のこほるらん秋風たちぬ宮城
 野のはら (三〇〇) 一
 るなり、四の句ものおもふ心をつくると詞をそ
 へてみるへし

四五一二三とつゝけてみるへし、秋風のたつに
 つけてむかし行てみし宮城野の露の深きことを
 思ひ出てよめる也

百首歌奉りける時 俊成卿

一六九 みしぶつきうゑし山田に引板はへて又袖ぬらす秋は
 きにけり (三〇一)

本歌、衣手にみしふつくすまでうゑし田をひた
 我はへてまもれるくるし、みしふは水波也、み
 しふをそてにつけてうゑし山田に鳴子を引て又
 稲葉の露にそでぬらす秋のきにけりといふ意也

後徳大寺左大臣

一七〇 夕されは萩の葉むけをふく風にことそともなく涙お
 ちけり (三〇三)

(学) ナシ

1 むかし行てみし—ナシ(野) むかしみし(乙)

2 の露深きこと—ナシ(野・乙)

3 思ひ出てよめる也—おもひやる意也(野) おもひ
 やりてよめる心也(乙)

(学) 家つとにひたはへては袖ぬらすにうとき詞也と
 いはれたふとさ苗とる山田のかけひもりにけり引しめ
 繩に露そこほるゝといへる歌に合はせてみればさのみ
 うとしともいはれず

1 百首歌—崇徳院に百首歌(学)

2 つけて—つきて(野)

3 そでぬらす—袖をぬらす(野)

4 秋の—秋は(野)

5 次に「伊勢か袖にひたはへてもるつなをのみ引時
 は稲葉に露そとまらさりけるとあるに合せみるへし」

(乙)

(学) ナシ

をきの葉むけを吹風は萩のはをひとかたにむけ
てふく風をいふ、ことそともなくは何のことも
なくといふ意也 「3」

俊成卿

一七一 をきの葉も契ありてや秋風のおとつれそむるつまと
なるらん (三〇五)

一二四三五とつゝけてみるへし、秋風¹を男にた
とへ萩を女によそへたる歌也²、ちきりは縁にて
おとつれそむるは女のもとにかよふをいふ³

題しらす

七条院権大夫

一七二 秋きぬと松ふく風もしらせけりかならず萩の上葉な
らねと (三〇六)

四五一二三とつゝけてみるへし、かならずはあ
なかちにの意也

百首歌に

式子内親王

一七三 うたゝねの朝けの袖にかはる也ならず扇の秋のはつ
かせ (三〇八)

〔学〕ナシ

1 秋風をく歌也―この一文文末に来る (野・乙)

2 よそへたる―たとへたる (野・乙)

3 かよふを―行を (野)

〔学〕ナシ

1 四五一二三ゝみるへし―この一文文末に来る (野)

〔学〕四ノ句ならしゝ扇のといはてはとおもはるれと、
手もたゆくならず扇のおき所わするはかりに秋風そよ
ふくといふ歌も同じ格なれば難にはあらず、四五一二
三と句を次第してみるへし、下句ならず扇のといふに

四五一二三とつゝけてみるへし、ならず扇のは
 ならしたる扇のゝ意也、したるのつゝめすと
 なるにてしるへし、手に「ならして吹せたる扇
 の秋のはつ風からうたゝねの朝けの袖にまこと
 の秋のはつ風とかはりて吹といふ意也

七夕の歌とて

俊成卿

一七四 棚機のとわたる舟のかちの葉にいく秋かきつ露の玉

つさ(三二〇)

一二の句はかちといはん有心の序にて、いく秋
 かきつはいく秋かきつらん也、つらんのつゝ
 めつとなるにてしるへし

百首歌の中に

式子内親王

一七五 なかむれは衣手すゝし久かたの天の川原のあきの夕

くれ(三二一)

三四五一二とつゝけてみるへし、二の句の下に
 かしこより風のかよひきぬらんとしふ意をふく
 めたる格也

てまことの秋のはつ風ならぬよしはしられたり、一首
 の意は手にならして吹せたる扇の秋の初風かけさは誠
 の秋のはつ風に吹きはれりといふ意なり

1 扇のゝ意也―扇のといふ意也(野) 2 はつ風

と―はつ風に(野) 3 かはりて吹と―かはりたり

と(乙)

(学) ナシ

(野) 天の川とわたる舟のかちの葉におもふことをは
 書つくるかな、此うたの詞をとられたり、一二の句は
 有心の序也、かちの葉に玉つさをかきていく秋たなは
 たに手向つらんとしふ意也

1 句はかちといはん有心の序―句用ある序にて(乙)

(学) ナシ

1 意をふくめたる格也―詞をそへてみるへし(野)

詞のそはる歌也(乙)

家に百首歌よみ侍りける時

前関白太政大臣

一七六 いかはかり身にしみぬらん棚機のつま待よひのあま

の川かせ (三三二) 4

三四五一二とつゝけてみるへし、一二の句はい

かはかり身にしみてうれしからんのごゝろなり

七夕の心を

公経卿

一七七 ほし合のゆふへすゝしき天の川もみちの橋をわたる

秋かせ (三三三)

三の句の下に先といふ詞のそはる歌也

五十首歌に

顕昭

一七八 萩か花真袖にかけて高まとの尾上の宮にひれふるや

たれ (三三二)

三四五一二とつゝけてみるへし、本歌宮人の袖

つけころも秋萩に匂ひよろしき高円の山、袖つ

け衣は領布^レをつけたる衣をいふ、ま袖にかけて

は両袖にかゝりてといふことにて、かりのつゝめ

(学) ナシ

1 一二の句ゝごゝろなり―身にしみぬらんは身にしみてうれしかならんの意也(野)

(学) ナシ

1 詞のそはる歌也―詞をそへてみるへし(野・乙)

(学) 此歌三四五一二と句を次第して意得へし、真袖にかけてといふてもしに意をふくめたる歌也、一首の意は高まとの尾上の宮に領巾ふるは誰ならんとおもへは萩の花か真袖にかゝりてそれとみえたるにて、誠にひれをふるにはあらずといふ意なり、萩か花真袖にかけてはま袖にかゝりての意にて例はしら雲の春はかさねて立田山云々、へたて行よゝのおもかけかきくらし云々、是もかさねてはかさなりてといふ意、へたて行はへたゝりゆくの意にて同じ格也

1 顕昭―顕昭法師(学) 2 本歌―ナシ(野) 3 次に「此歌をとれり(野) 4 袖つけ衣は―ナシ(野)

きとなるをけとはたらかしたる詞也、此句の下
 にし⁹かみえたる也といふ詞をそへて」みるへし、
 その心をいひのこしてとちめたる格也、高
 円¹⁰の尾上の宮にひれふりて我をまねくは誰なら
 んとおもへは秋の花がわけ行人の真袖にかゝり
 てしかみえたるなりといふ意なり

千五百番歌合に

良平

一七九 ゆふされは玉ちる野へのをみなへし枕さためぬ秋風
 そふく(三三八)

玉ちるは露¹に玉ちるにて魂ちるをそへたり、ゆ
 ふへといひ野へといひ女郎花といへるにて露²な
 ることはしられたり、枕³さためぬはかよふ男に
 枕のさたまらぬにて、秋風⁴に男のあくをそへた
 り、是は女郎花をうかれめにたとへたるにて、
 玉ちるは魂⁶のちるはかりに物を思ふといふ意也

百首歌に

俊成卿⁵

一八〇 いとかくや袖はしをれし野へに出てむかしも秋の花

- 5 いふ―袖つけ衣とはいふ也(野) 6 といふこ
 とにて―といふ意にて(野)也(乙) 7 かりの
 詞也―ナシ(野) 8 詞也―詞とするへし(乙)
 9 しかみえたる也―しか見えつ(野) しかみえたり
 (乙) 10 その心を―さる心を(乙) 11 いひの
 こして―ふくめて(野) ふくめていひのこして(乙)
 12 おもへは―よくみれば(野) みれば(乙) 13 み
 えたるなり―みえたり(乙)

[学] ナシ

- 1 露に玉ちるにて―そへたり―魂のちるはかり物を
 思ふといふ意にて露の玉のちる也(野) 2 露なる
 ことはしられたり―露と聞ゆ(野) 露なることをしる
 へし(乙) 3 かよふ―意也―男の枕のさたまらぬ
 にて秋風に人の飽をそへたり(野) 4 男のあくをそ
 へたり―人のあくをかねたり(乙) 5 にて―歌也
 (乙) 6 ちるはかりに―きゆるはかり(乙) 7
 物を思ふといふ意也―物おもふをいふ

[学] ナシ

- 1 袖の―意也―初句のやは意のうらへかへるや也、
 老ぬる身はむかしにかはりて秋の野の花をみるにも涙

はみしかと(三四一)

三四五二とつゝけてみるへし、袖のしをるゝ

はなみたにしをるゝにて²二の句はいとかくや

袖はしをれし袖はしをれざりしをとうらへかへ

る意也

式子内親王

一八一 花すゝきまだ露深しほにいてゝなかめしと思ふ秋の

さかりを(三四五)

三四五二とつゝけてみるへし、な¹かむるは空

をな²かむるにて物おもふ時のしわさなれはもの

を思ふといふことにもなる也、こゝにてはその

意³にて、一二の句は花すゝきの袖はまだ露深し

といふこと也、尾花の袖草のたもと⁴なといへる

にてしか聞ゆ、今は忍⁵はすいろにいてゝ物はお

もふまじと思ふ秋のあはれのさかりになる物を

花すゝき⁷の袖はほにいてゝもまだ露⁶の深きは

はいかなることそと也

にいたく袖のしをるゝよし也(野)

2 一二の句は初句のやはこゝろのうらへかへるや

也(乙) 3 とうらへかへる意也—といふ意也(乙)

〔学〕百首歌に

〔学〕五ノ句のをもしはなるものををなり、上句花

すゝきの袖はまた露ふかし我はほにいてゝと詞をそへ

て見るへし、一首の意はわれほにいてゝなかめはを

しとおもふ秋のかなしきさかりなるものをすゝきはほ

にいてゝもまた袖の露か深くてものをおもふさま也と

いへるなり

1 なかむるはゝことそと也—三四五の句は我はかほ

の色にいてゝ物をおもはじと思ふ秋のかなしきたゞ中

なるものをといふ意、一二の句は花すゝきはほにいでゝ

もまたものおもふさまにて露深しといふ意也(野)

2 ものを思ふ—ものおもふ(乙) 3 意にて—こゝ

ろに聞えたり(乙) 4 いふこと也—詞をそへてみ

るへし(乙) 5 忍はす—顔の(乙) 6 露の—露

が(乙) 7 はいかなることそと也—といふ意也(乙)

百首歌奉りける時 撰政太政大臣

一八二 荻の葉にふけはあらしの秋なるを待ける夜はさをし
かのこゑ (三五六)

をきの葉にふけはあらしか³秋のあはれさなるも
のをそのうへに待ける夜はのさ⁴をしかのこゑ⁵が
きこえて、いよ⁶あはれをましたりといふ意
也

一八三 おしなへておもひしことの数々に猶いろまさるあき
の夕くれ (三五七)

一¹二の句はひと²ほりに思ひしこと³のといふ意²
也、四の句の猶を二の句の上におきかへてみる³
へし、数々には格別⁴にといふことにて、伊勢物
語に数々に思ひおもはずとひかたみ云々⁵とある
歌の数々に同し意也⁶、いろまさるはおもひの
いろのまさるをいふ、ひと⁷ほりに思ひし⁶。
ことも秋の夕へはいと⁷かなしくおもはるゝと
いふ意也

〔学〕三ノ句は秋なるものをの意也、一首の意は荻の
はにふけはあらしかよなき秋のあはれさなるものを
まちける夜はのさを鹿のこゑか聞えていよ⁶あはれ
をそへたりといへる也

1 ける―し(学) 2 ふけはあらしか―あらしの
ふけは(野) 3 秋の―それか(野) 4 さおし
か―鹿(乙) 5 がきこえてゝといふ意也―に又あ
はれをそへたりといふ意也、秋をあはれといふ意より
用ひたり(野) 6 ましたり―しそへたり(乙)

〔学〕家つとに色といふことをときひかめられたり、
是は上句におもひしといふこと³のあはれはおもひの色と
いふことにて数々⁴にはひと²つゝ³にといふこと³る也
1 一二の句は―おしなへては(野) 2 意也―こ
と也(野) 3 みるへし―意得へし(野) 4 格
別にといふことにて―ナシ(野) 5 云々―ナシ
(野) 6 意也―ことにてふかくといふ意也(野) 7
ひと⁷ほりに⁷意也―上におもひしをあるにてしか聞
ゆ(野)聞えたり(乙)

題しらす

一八四 くれかゝる空しきそらの秋をみておほえすたまる袖

の露かな (三五八)

上句はくれかゝる空のむなしき秋をみてと詞を

次第してみるへし、むなしき秋とは空しきそら

に何となく秋のあはれのあるをいふ、おほえす

はおもはず也

家に百家歌合し侍りけるに

一八五 ものおもはてかゝる露やは袖におくなかめてけりな

秋のゆふくれ (三五九)

なかめてけりなはなかめてけらしなのなにてら

しをりとつゝめたる辞也、二の句のやは意の

うらかへるやはにてながむるはものおもふ時の

しわざ也

山路秋行

一八六 み山路やいっより秋のいろならんみさりし雲のたく

れの空 (三六〇)

慈円大僧正

〔学〕 ナシ

1 上句は―くれかゝるは空へつゝきむなしきは秋へ

かゝれり (野)

2 みるへし―意得へし (野)

3 むなしきくおもはず也―槓たつ山の秋のたくれな

といへると同じこと也、心をとめてよくあちはひみる

へし (野)

〔学〕 ナシ

1 にて―の意也 (野)

2 らしをりとつゝめたる辞也―らしのつゝめりと

なるにてしるへし (野)

3 二の句のやは意のうらへかへるやはにて―ナシ

(野・乙)

4 ながむるは―なかむるにて (乙)

5 ものおもふ時のしわざ也―空をなかむるにて物を

おもふ時のしわざ也 (野)

〔学〕 ナシ

1 慈円大僧正―慈円 (野・乙)

2 つひにみたることもなき―ナシ (野) つひにみざ

一四五二三とつゝけてみるへし、見ざりし雲は
 つひにみたることもなきくれなるの雲といふ意²
 也、⁴上に秋のいろとあるにてしか聞ゆ、⁵四の句
 の下にかゝるといふことはをそへてみるへし、
 つひにみざりしくれなるの雲の山路の空にかゝ⁶
 るとみしは紅葉也けり、⁷さてはいつより秋のい
 ろになりしならんといふ意也⁸

題しらす

寂蓮法師

一八七 さひしさはそのいろとしもなかりけり楨たつ山の秋
 の夕くれ(三六一)

四五一二三とつゝけてみるへし、¹二三の句はそ
 の色によりたることにてもなかりけりといふ意
 也、²笹の葉に風吹よわる夕くれの物のあはれは
 秋としもなし、²此結句も「³同じ格にて、⁴秋に
 よりたることにてもなしといふこゝろ也

西行法師

一八八 心なき身にもあはれはしらけり鳴たつさはの秋の

りし(乙) 3 といふ意也―をいふ(野) 4 上
 ―ナシ(野) 5 聞ゆ―聞えたり(乙) 6 つひに
 也けり―下句はいまたみざりしくれなるの雲のかゝる
 夕くれの空といふ意にて紅葉を雲と見なしたる也(野)
 これは紅葉をくれなるの雲と見なしたる也、つひにみ
 ざりしくれなるの雲のかゝるみ山路の夕くれの空をよ
 くみれば紅葉にて雲にはあらず(乙)
 7 さては―二三の句は(野)ナシ(乙)
 8 なりし意也―なるらん今は紅葉のさかり也とい
 ふ意也(野)
 (野本頭書)み山路やみざりし雲の夕くれの空よくみ
 れは雲にはあらず、いつより秋のいろならん、そは紅
 葉のさかり也といふ意也

(学) ナシ

1 二三の句はそのいろとしもなかりけりは(野)

2 此結句も―此歌の秋としもなしも(乙)

3 同じ格にて―ナシ(野・乙)

4 こゝろ也―意にて同じ格也(野・乙)

(学) ナシ

ゆふくれ (三六一)

四五一二三とつゝけてみるへし、 鴨立はしきの

たつ羽おとのさひしきをいふ、 三の句の下に心²

ある人ならはいか³はかりあはれならんといふこゝ

ろをふくめたる歌也

¹ 百首歌に

² 定家卿

一八九 見わたせは花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の

ゆふ暮 (三六三)

四五一二三とつゝけてみるへし、 二の句の下に

あはれはといふ詞⁴のそはる歌也、 世に花紅葉は

かりあはれなる物はなしと思ひしに浦のとまや

の秋の夕くれのけしきを見わたせばその花も紅

葉もあはれはなきものなり」けりといふこゝろ

なり

¹ 五十首奉りける時

² 雅経卿

一九〇 たへてやは思ひありともいかゝせんむくらの宿の秋

のゆふくれ (三六四)

1 のさひしきをいふ—をいふ(野)

2 心ある—心あらん(野)

3 いかはかりあはれならん—いかにあはれならまし

(野)

(学) うらのとまやの秋の夕くれのあはれなるけしき

には花も紅葉もおよはさりけりといふ意をつよく聞せ

てなかりけりとはいへるなり、二三ノ句いひしらすめ

てたし、家つとの難はあたらす

1 百首歌に—西行法師すゝめたれ百首歌に(学)

2 定家卿—定家朝臣(学)

3 みるへし—ナシ(野)

4 詞のそはる歌也—そへてみるへし(野)

(学) 本歌おもひあらはむくらの宿にねもしなんひし

きものには袖をしつゝも、初句は四五の句のつゝけり、

一句はなちては聞えず。月やあらぬはるやむかしの春

ならぬ云、此歌の初句も一句はなちては聞えず。同

し格也。おもひありともはおもふ心はありとても意

本歌思ひあらはむくらの宿にねもしなんひしき
ものにはそれをしつゝも、一四五二三とつゞけ
てみるへし、たへてやはすまるへき律の宿の秋
の夕くれならん、たとひ女におもふ心ありとも
その心を何にせんといふ意也

秋歌とて

宮内卿

一九二、 おもふことをさしてそれとはなき物を秋のゆふへを
こゝろにそとふ (三六五)

我身¹におもふことをさしてそれとはなきものを
かくかなしきはいかにと、秋のゆふへを心³にそ
こゝろのとふと詞をそへてみるへし

長明

一九二、 秋かせのいたりいたらぬ袖はあらじたゝ我からのつ
ゆのゆふくれ (三六六)

春のいろのいたりいたらぬ里はあらじ云、こ
の歌の詠格をとれり、下句はたゞ我心からおく
露²の夕くれと詞³をそへてみるへし、心⁴からおく

也、一四五二三と句を次第してみるへし、一首の意は
わひしさにたへてはえずまれぬむくらの宿の秋の夕く
れなればおもふ心はありとてもいかゞせんといへる也
1 ける―し(学) 2 雅経脚―藤原雅経(学)
3 それ―袖(野) 4 ならんたとひ女に―我をおも
ふ(野)たとひ女に(乙) 5 何に―いかゞ(野・
乙)

(学) ナシ

1 我身に―三句のものをに心をふくめたる格也(野・
乙) 2 いかにと―いかなること(野) 3 心に
そゝろのとふ―心にそとふ(野・乙)

(学) ナシ

1 とれりの下に「二の句いたらぬ人の袖はと詞をそ
へてみるへし」(野)
2 露の―袖の露の(野)
3 詞をそへてみるへし―いふ意にて三の句の袖をこゝ
にひゝかしたる格也(野) いふ意にて(乙)
4 心からゝなり―ナシ(野)

露はなみだなり

西行

一九三 おほつかな秋はいかなる故のあはれはすゝろにもものゝ
かなしかるらん (三六七)

四の句のすゝろはふとおもはずといふ意也

式子内親王

一九四 それなから昔にもあらぬ秋風にいとゝなかめをしつ
のをた巻 (三六八)

本歌はいにしへのしつのをたまきくりかへし昔
を今になすよしもかな、四五の句はいとゝな
かめをするといふ秀句¹なり、しつ¹のつゝめす
となるにてしるへし、秋風にのにもじはなれば
の意也²、此ことさきにもいへり³

千五百番歌合に

通具卿

一九五 深草のさとの月かけさひしさもすみこしまゝの野へ
の秋かせ (三七四)

本歌としをへてすみこし里をいてゝいなはいとゝ

[学] ナシ

1 四の句のーナン(野)

[学] いとゝに糸をそへたり、秋風には秋かせなれば
の意にて、いとゝなかめをしてとしつのをた巻へいひ
かけたる秀句也

1 四五の句ゝ秀句也ーいとゝなかめをしつといひか
けてしつはするの意也

2 意也ーこゝろのに也(乙)

3 此ことさきにもいへりーナン(野・乙)

[学] 二ノ句はよひ出しの句にてそのつきかけのとい
ふ詞のそはる格也、一首の意はふかくさの里の月かけ
その月かけの淋しさも野への秋風のさひしさも住こし
むかしのまゝ也となり

深草野とやなりなん、二の句はよひ出しの句にて、その月かけのといふ詞のそはる格也、月かけのさひしさもといへるにて秋風のさひしさも住こしまゝなることはしられたり、里といひ野といへるに心をつけてみるへし、深草は月かけのさひしさも秋風のさひしさも住こしまゝなれと里はあれて野となりたりといふ意也

杜間月といふことを 俊成卿⁹。

一九六 大あら木の杜の木間をもちかねて人たのめなる秋の

よの月 (三七五)

此歌は木間をもちかねて人たのめなる大あら木の杜の秋のよの月と詞を次第してみるへし、大あら木のもりといへは月かけのいかにももるへくおもはるれど、さしもあらねば人たのめなるとはいへる也

五十首歌に 家隆卿

一九七 有明の月まつ宿の袖の上に人たのめなるよひのいな

1 通具卿―通具朝臣(学)

2 昔のまゝなれと―むかしのまゝなから(野)

(学) ナシ

1 此歌は木間を―是は木の間を(野)

2 みるへし―意得へし(野)

3 いかにも―ナシ(野・乙)

4 おもはるれど、さしもあらねば―おもはれてしかあらぬを(野) おもはるれどさしもあらぬゆゑに(乙)

(学) ナシ

1 我―わが(野・乙)

2 まつ月のいてたるかけかとみるに―月のかけかとおもはせて(野) 月のかけかとみれば(乙)

つま (三七六)

三の句の上に我¹といふ詞をそへてみるへし、こ
れもまつ月のいてたるかけかとみるに、さしも²
あらぬいなつまなれは人たのめなるとはいへる
也

百首歌合に

有家卿

一九八 風わたる浅茅か末の露にたにやとりもはてぬよひの

稲つま (三七七)

風わたるといへるにておつる露なることはしら
れたり、あさぢとあるに心をつくへし、浅ぢが
すゑよりおつる露のあひたゞにやとりもはてぬ
稲妻なれば、その露よりもいと、はかなしとい
ふ意也

十首歌奉りける時

通光卿

一九九 むさし野やゆけとも秋のはてそなきいかなる風の末

にふくらん (三七八)

二三の句はゆけとも、秋のあはれのはてそな

3 さしもあらぬ—あらぬ(野)

[学] ナシ

1 おつる—ちる(野)

2 あさぢとあるに心をつくへし—ナシ(野) あさぢ

といへるに心をつけてみるへし(乙)

3 あひたゞに—間をたに(野)

4 やとりもはてぬ—やとりはてぬ(乙)

5 稲妻なれば—いなつまは(野・乙)

6 その—ナシ(野)

7 いと、—ナシ(野)

[学] 家つとに下句猶行すゑもいかなしからんと
いふ意にとかれたるはわろし、一首の意はむさし野は
ゆけとも、秋のはてそなき猶ゆく末はいかなる秋風
がふきていとあはれなるけしきならんとなり、秋にあ
くをそへたり

1 十首歌奉りける時—水無瀬にて十首歌奉りし時(学)

2 通光卿—通光朝臣(学) 3 ゆけとも、—ゆ

きと詞をそへてみるへし、⁴ 下句は末にはいかに
あはれなる秋の風のふくらんといふ意にて、む
さし野の千種の花ざかりに行ておもしろきけし
きをよめる意也⁸

百首歌奉りける時

慈円大僧正

二〇〇

いつまでか涙くもらて月はみし秋まちえても秋そこ

ひしき(三七九)

┌₁₀

¹ 二の句涙にくもらてにもしをそへてみるへし、
上句はいつまでか涙にくもらて月はみし、みれ
はそのまゝ涙にくもりてみえずといふ意にて、
下句は月待えても月を恋しきといふ意也、³ 秋は
月のかへ詞にて此こと春部の花の歌の下にもい
ひてそれともし格也⁸

式子内親王

二〇一

なかめわひぬ秋より外の宿もかな野にも山にも月や

すむらん(三八〇)

一四五二三とつゝけてみるへし、是も秋は月の

けとも(野) 4 と詞をそへてみるへし—の意也、秋
をあはれといふことにかつ用ひたり(野) 5 下句
は末には—下句(野) 6 秋の風のよめる意也—
風の末に吹らんの意也(野) 7 花ざかりに行て—
花ざかりの(乙) 8 意也—歌なり(乙)

(学) 秋は月のかへ詞にて、月まちえても月を恋しき
也、此ことくはしくは雑部にいふをみてしるへし

1 二の句くみるへし—涙くもらては涙にくもらせて
也(野) 二の句は涙にくもらせて也(乙) 2 意に
て—意也(野・乙) 3 意也—意にて(野・乙)

4 詞にて—詞也(野・乙) 5 春部の—春の部
(野) 春の(乙) 6 下にも—下に(乙) 7 い

ひて—いへり(野・乙) 8 それともし格也—そこ
に合せみるへし(野) 合せみるへし(乙)

(乙本・別筆頭書) 諸本初句をいつとてか、此先生は、
いつまでかなりといへり、されと古本は皆いつとてか
となり、先生一家の独意なり

(学) 三ノ句の下にとおもへともといふ詞をそへて見
るへし、是も秋は月のかへ詞にて、月より外の宿もか
なの意なり

かへ詞にて、月より外の宿もかなの意也

頼政卿¹

二〇二 こよひたれす、吹(風)を身にしましてよし野のたけ

の月をみるらん(三八七)

身にしましては我物にしてといふ意にて、すゝは

小竹也、「月のおもしろかりける夜、よし野山

のおくにうき世をのかれたる人をおもひやりて

よめる意也

月のうたあまたよみける中に

重家¹

二〇三 月みれはおもひそあへぬ山たかみいつれの年の雪に

かあるらん(三八八)

これは天山不弁何年雪といへる月の詩をとりて²

よめる也、思ひそあへぬは不弁といふに同じく、⁴

山高みは天山といふにあたり、山のはの月を⁵

雪とみなしたる意也⁶

湖辺月といふことを

家隆卿

二〇四 鳩の海や月の光りのうつろへは波の花にも秋はみえ

[学] ナシ

1 頼政卿—頼政(野・乙)

[野] すゝは小竹也、身にしましては我身のものにするをいふ、身にしましてといへるにてよし野のおくに住人なることはしられたり、よし野山にすめる人をうらやみたる意也

[乙] すゝは小竹也、身にしましてといへるにてよし野山に住人なることはしられたり、身にしましてはわかものにしてといふこと也、世をのかれてよし野のおくにすむひとをうらやみてよめる歌也、頼政の身の上にあてゝみるへし

[学] 此歌尾張の家色にもれたるはいかゝ、かならず入へき歌也、楽天か月詩に天山不弁何年雪とある句をとりてよめり、おもひそあへぬは不弁といふ句にあたり、山高みは天山といふことぬあたり、嶺にかゝる月をのこる雪かと思てあやしめる歌也、

1 重家 太宰大式重家(学) 2 いへる—いふ(野) 3 とりてよめる也—とれり(野) よめるなり(乙)

4 不弁とくあたり—不弁にて山高みは天山をいふ(野) 5 山のはの月を—山のはにいでたる月を(野) 山に出たる月を(乙) 6 みなしたる意也—みたる也(乙)

[学] ナシ

けり (三八九)

本歌、草も木もいろかはれともわたつみの波の
花には秋なかりけり、結句秋のいろはみえけり
の意也 ¹ 〔II〕

秋歌の中に

慈田大僧正

二〇五 更ゆかはけふりもあらし塩かまのうらみなはてそ秋

夜の月 (三九〇)

三四五一二のつゝけてみるへし、四の句はうら

みはてすしてまぢみよのこゝろ也

題しらす

俊成卿女

二〇六 ことわりの秋にはあへぬ涙かな月のかつらもかはる

ひかりに (三九一)

ことわりは道理といふことにて、あへぬはたへ
ぬと同じ意也、四五一二三とつゝけてみるへし、
結句のにもじはなればの意にて、此ことさきに
もいへり、三の句涙のいろ哉と詞をそへてみる
へし、月のかつらもかはる光りなればそのこと

1 の意也—と詞をそへてみるへし (野)

〔学〕 ナシ

〔学〕 五ノ句はかはる光なわの意にて、月のかつらの
紅葉するをいふ、一首の意は月のかつらもかはる光な
れはそのことわりの秋にはたへす涙の色までかはりた
りといへるなり

〔野〕 四五一二三とつゝけてみるへし、あへぬはたへ
ぬと同じ意也、月のかつらもかはる光りにつれてその
ことわりの秋にはあへぬ涙のいろかなと詞をそへて意
得へし

わりの秋にはたへすしてなみたもくれなるにな
りたることかなといふころ也 一

家隆卿

二〇七 なかめつゝ思ふもさひし久かたの月のみやこの明か

たのそら (三九二)

三四五二とつゝけてみるへし、二の句は思ひ

やるも淋しといふ意にて、此句の下にその月の

都にすむ人はいかにさひしからんといふ意をふ

くめたる歌也

¹ 月前草花といふことを 撰政太政大臣

二〇八 ふるさとの本あらの小萩咲しより夜な／＼月のかけ

そうつろふ (三九三)

かけそのそは心のうらへかへるそにて、夜な／＼¹

月のかけそうつろふ人は見にもこでといふ意也、

人³のこぬよしは故郷といへるにてしられたり

山家秋月といふことを

二〇九 時しもあれふるさと人はおともせてみ山の月に秋風

[学] ナシ

[学] 此歌家つとに、何のふしもなしといへるはたか
へり、一首の意は折よく月の夜ひに咲出たればよ
な／＼月のかけはうつろへと故郷なれば誰も萩の花見
にくる人はなしとなり、これもくる国はなしといふ意
は月のかけそうつろふといふ句よりいてくる余韻也、
そもしに心をつけて見るへし

1 月前草花といふことを―月前草花(学)

2 夜な／＼―ナシ(野)

3 人のこぬよしは故郷といへるにて―故郷といへる
にて人のこぬよしは(野・乙)

そふく (三九四)

12

時しもあれは時も外にあるへきことなれといふ
 こと也、るへきことなれのつゝめれとなるに
 てるへし、この句は結句へかゝれり、下句は
 み山の月におと²たて、秋風そふくといふ意也、
 人はおともせてとあるよりひゝきてしか聞ゆ、
 二の句の上³にまたるゝといふ詞をそへてみるへ
 し

深山月といふことを

二一〇 深からぬ外山の庵のねさめたにさそな木間の月は淋
 しき (三九五)

さそなはかくの如くといふ意にて、深からぬ外
 山のいほのねさめたにかくの如く木間の月はさ
 ひしければ、おく山の月はいかはかりにかと²
 もひやりたる意也

月前松風

寂蓮

二二一 月は猶もらぬ木間もすみよしの松をつくして秋風そ

[学] ナシ

- 1 いふこと也—いふ意也(野・乙)
- 2 おとたて、秋風そ—秋風のおとをたて、(野)
- 3 あるより—いふより(野)

[学] 一首の意は木間よりかけのもりきて外山の庵の
 ねさめたにかやうに淋しきことなれはおく山の月はい
 かはりかはおもひやりたる意なり、こなたをいひて
 かなたを聞せたる深山の月の歌なり、家つとの難はあ
 たらす

1 深山月といふことを—八月十五日夜和歌所にて深
 山月といふことを撰政太政大臣(学)

2 にかとおもひやりたる意也—にかといふ意也(野)
 にかとおもひやりたる意也(乙)

ふく(三九六)

猶¹といふ詞を二の句の下におきかへてみるへし、
木間もなほすむといひかけたり、すむは風のお
とのすむをいひて、松をつくしては松をのこさ
すの意也⁴

長明

一一二二 なかむれは千々にもの思ふ月に又わか身ひとつのみ

ねの松風(三九七)

本歌、月みれはち々に物こそかなしけれ我身ひ
とつ秋にはあらねと、千々にもの思ふはいろ
く¹に物のおもはるゝ也、はるるのつゝめ
となるにてするへし、月に又は月の上²に又也、
のうへ³にのつゝめ⁴となるにてするへし、我
身ひとつは我身ひとつにふく此といふことな
り、にふくこのつゝめ⁴となるにてするへ
し

山月といふことを

秀能¹³

(学) ナシ

1 猶といふ詞を―猶を(野)

2 風―秋風(野)

3 いひて―いふ(野・乙)

4 意也―也(乙)

(学) ナシ

1 おもはるゝ也―おもはるゝといふ意也―(野)お

もはるゝの意也(乙)

2 月に又はく又也―ナシ(野)

3 ことなり―意也(野)こゝろなり(乙)

(学) ナシ

(野) ねさめて夜深き月をみるかな也

(乙) 苔の上にねさめて夜深き月をみるかなとこと

二二三 あし引の山路の苔の露の上にねさめ夜深き月をみる
かな（三九八）

四の句ねさめして夜深きと詞をそへてみるへし

秋の月といふことを 宮内卿

二二四 心あるをしまの海人のたもかな月やとれとはぬれ
ぬものから（三九九）

四五一二三とつゝけてみるへし、ものからは物

なから也

丹後

二二五 わすれしな難波の秋の夜はの空こと浦にすむ月はみ
るとも（四〇〇）

二三四五一とつゝけてみるへし、秋は月のかへ

詞にて、此こと前にもいへり、こと浦は外のう

らといふこと也²

長明¹

二二六 松しまや汐くむ海人の秋の袖月はものおもふならひ
のみかは（四〇一）

はをそへてみるへし、山路の苔の露の上たにわひしき
にねさめて夜深き月をみるかなといふ意也

〔学〕ナシ

1 秋の月―秋月（野・乙）

〔学〕ナシ

1 此こと前にもいへり―ナシ（野・乙）

2 こと也―意也（野）こゝろ也（乙）

秋の袖といひて月のやとれる袖なることを聞せたり、「下句月はもの思ふ袖にやとるならひのみかはとことはをそへてみるへし、袖といふことは上よりひゝきてそはる詞也

七条院大納言

二二七 ことゝはん野島かさきのあま衣月と波とにいかゝし

おるゝ(四〇二)

三の句はよひ出しの句にて、その海人衣はといふ詞のそはるゝ格也、二三四五一とつゝけてみるへし

海辺月を

家隆卿

二二八 秋夜の月やをしまのあまの原あけかたちかき沖のつ

りふね(四〇三)

月やをしむとをしまへいひかけて、又をしまの海人と天の原へいひかけたり、明かたちかき沖につり舟のみゆるは海人が月をゝしむならんといふ意也

〔学〕秋の袖といふ句いひしらすめてたし、袖に月のやとりたるさま也

1 長明―鴨長明(学)

2 月のやとれる袖なることを―袖に月のやとりたることを〔野〕

3 袖といふゝ詞也―ナシ(野)

〔学〕ナシ

〔野〕三の句海士の衣はと詞をそへてみるへし

〔学〕ナシ

1 秋夜の―秋のよの(野)

2 月やをしむゝいひかけたり―をしむといひかけ海士といひかけたり(野)

3 て、又―ナシ(乙)

4 海人が月を―月を海士か(野)

題しらす

慈円大僧止¹⁴

二二九 うき身にはなかむるかひもなかりけり心にくもる秋

の夜の月 (四〇四)

四五一二三とつゝけてみるへし、心¹にくもるは

心からこほす涙にくもるにて、心¹にのにもしは

よりの意也

通光¹脚

二二〇 立田山夜はにあらしの松ふけは雲にはうとき嶺の月

かけ (四一二)

松に先をかねて、あらしの松ふけは空²はれて先

雲にはうとくなりし也、くなりし⁴のつゝめき

となるにてしるへし、下句雲にはうとくなりた

れと嶺にはうとからて今にかくれん月⁵がをしき

といふ意也、雲にはとあるにはに心をつけてみ

るへし

殷富門院大輔

二二二 なかめつゝおもふにぬるゝたもとかないく世かはみ

(学) ナシ

1 心にくもるは意也―四の句心から落る涙にくも

る也(野)心にくもるは心にくもりてみゆる也、りて

みゆるのつゝめるとなるにてしるへし(乙)

(学) あらしの吹はらしたる故に雲にはうときなり、

にはといふにてにをはにこゝろをつくへし、みねには

うとからずして月のかくるゝよしなり、三ノ句の松に

先をかねたり清濁かよはしてよむならひ也、かへりこ

んほとおもふにもたけくまのまつわか身こそかなしけ

れといふ歌の松も先をかねたり

1 題しらす 通光朝臣(学) 2 空はれて―ナシ

(野・乙) 3 うとくなりし也―うとき也(野)

4 くなりしゝ心をつけてみるへし―雲にはのに

は心をつけてみるへし、あらしにはれて雲には先うと

くなりたれと嶺にはうとからて月のかくるゝかをしと

いふ意也 5 月―ナシ(乙)

(学) ナシ

1 四の句―四の句は(野・乙)

ん秋のよの月(四一五) 「

四五一二三とつゞけてみるへし、四の句今いく

世かはみん、いく世もみることはあらしと意の

うらかへるにてにをは³也

式子内親王

二三二 宵のまにさてもねぬへき月ならば山のはちかき物は

おもはじ(四一六)

さてもねぬへきはさておきてもねぬへきのこゝ

ろなり、山のはちかきは山のはちかくなるにの

意也、くなるにのつゞめきとなるにてしるへ

し

二三三 ふくるまてなかむれはこそかなしけれ思ひもいれし

秋夜の月(四一七)

更るまてなかむれはこそをしまれてかなしくな

りけれ、今よりは秋夜の月を深く思ひいれじと

いふ意也⁴

五十首歌奉りける時 摂政太政大臣

2 と意のうらへてにをは也—の意也(野)

3 てにをは也—格也(乙)

(学) ナシ

1 さてもねぬへき—さてもはうちすてゝおきても

(野)

(学) ナシ

1 かなしくなりけれ—かなしくもなれ(野) かなし

けれ(乙)

2 今よりは—今より(野・乙)

3 月を—月は(野・乙)

4 いふ意也—也(野)

二二四 雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月をみ

るかな(四一八)

15

四の句の下に声をきつといふ詞をそへてみるへし

二二五 月たにもなくさめかたき秋のよの心もしらぬ松のか

せかな(四一九)

初句は此おもしろき月たにも²の意也、四の句の

上にわがといふ詞をそへてみるへし

1 定家卿

二二六 さむしろやまつ夜の秋の風ふけて月をかたしくうち

のはし姫(四二〇)

更てに吹てをそへて²けと³きをかよはしたり、四の句は月をかたしくらん也、くらんのつゝめてくと成にてしるへし

野径月

撰政

二二七 行末は空もひとつのむさし野に草の原よりいつる月

かけ(四二二)

[学] ナシ

1 声を―その声を(野)

2 詞をそへてみるへし―意をふくめたる歌也(野)

[学] ナシ

1 初句は―意也―ナシ(野)

2 の意也―也(乙)

へし

[学] 結句にさそわひしからんといふ詞をそへてみる

1 定家卿―定家朝臣(学)

2 そへて―そへたり(乙)

3 をかよはしたり―はかよへり(乙)

[野] 月をかたしくは月をかたしくらん也、くらんのつゝめくとなるにてしるへし、ふけてにふきてをかねたり

[学] むさし野ニはむさし野なるにの意なり、下句の上にも又といふ詞をそへて見るへし、山里とはかはりて見なれぬ眺望のけしき也

[野] 三の句のもしはなれはの意也

三の句のにもしはなるにの意にて、此句の下に
又といふ詞をそへてみるへし、行末は空もひと
つにみゆるむさし」野なるに、又くさのほらよ
り月のいてたるは都に見ぬけしきにていとめつ
らしといふ意也

雨後月

宮内卿

二二八 月をなほまつらんものかむら雨のはれ行雲のすゑの

さと人(四二三)

三四五一二とつゝけてみるへし、¹はれ行雲の末
の里人は月を猶まつらんものかといひて、³こゝ
には月をはやまちいてたることを聞せたり⁴⁵

題しらす

通真卿

二二九 秋の夜はやどかる月も露ながら袖にふきこす荻のう

は風(四二四)

宿かる月もはやとかる月をものをもしをはふけ¹
る詞にて、袖に吹こすは袖にふきくる也、²荻ふ
く風のおとのかなしくておつる涙なるを荻にや³

〔乙〕三の句のにもしはなれはの意也、下句山よりは
いてすして草の原よりいつる月かけと詞をそへてみる
へし

〔学〕ナシ

- 1 はれ行雲の末の里人は―ナシ(野)
- 2 ものかといひて―といへるにて(野・乙)
- 3 こゝには―此里には(野)
- 4 はやく聞せたり―待えたる意、聞えたり(野)
- 5 を聞せたり―は聞えたり(乙)

〔学〕ナシ

- 1 をもしをはふける詞にて―意にて(野)
 - 2 袖に吹こす也―荻の葉にやとる月也(野)
 - 3 涙なるを荻にやとる―なみたを(野)
 - 4 露を袖に―たる也―袖に風の吹こほす露とおもひ
なしたる也、袖に吹こすは袖にふきくるの意也(野)
- 袖に風のふきこぼすやうに思ひなしたる也(乙)

とる月かけなから¹⁶露⁴を袖に風のふきゝたる
やうにおもひなしたる也

家長

一三三〇 秋の月しのに宿かるかけたけて小笹かはらに露ふけ
にけり(四二五)

しのにやとかるはしけくやとるにて、露¹ふけに
けりは露²のふかくなりたるをいふ、万葉集に、
其草深野³といへる詞あり、是もその草⁴ふかき野⁵
といふことにて、⁶同じ格也、かけたけてはかけ
のかた⁷ふくをいふ

¹ 田家月といふことを 前太政大臣

一三三一 風わたる山田の庵をもる月や穂波にむすふこほりな
るらん(四二六)

山田のいほをもるかけのさむければ、月を稲の
ほ波にむすふ氷とみなしたるにてまことの波と
氷にはあらず

田家月

慈円大僧正

〔学〕露ふけにけりは、露のふかくなるたることをい
ふ、万葉集に、其草深野といふことあり、その草ふけ
ぬはそのくさの深き野といふ意にて、ふけもふかきも
同じこと也、深き田をふけ田といふにてしるへし
1 にて一也(野) 2 なりたるをいふ一なるをい
ふ(野)なりたる也(乙) 3 万葉集に一万葉集の
詞に(野) 4 いへる詞あり一とあるにてしるへし
(野) いふ詞のあるにてしるへし(乙) 5 是も
同じ格也一ナシ(野) 6 にて、同じ格也一也(乙)
7 かたふくをいふ一かたふきて也(野)

〔学〕ナシ

1 田家月といふことを一田家に月をみるといふこと
を(野)
2 山田の一ナシ(野・乙)
3 にてまことの波と氷にはあらず一也(野・乙)

二三三 雁のくるふしみの小田に夢さめてねぬ夜の庵に月を

みるかな (四二七)

ふしみにふして見るを¹そへて、上下をかけ合せ

たるうた也、雁のくる小田にふし見の夢さめて

庵にねぬ夜の月をみるかなと詞を次第してみる

へし

俊成卿女

二三三 稲葉ふく風にまかせてすむ庵は月そまことにもありあ

かしける (四二八)

一二の句、稲葉ふく風に引板をまかせてと詞を

そへてみるへし、引板を風にまかせて人は庵も

もらねは、月そまことにありあかすといふ意也²

千載集秋部に、おどろかすおとこそよるの小山³

田は人なきよりもさひしかりけれとある、此歌⁴

も引板といはずしてしか聞せたる格也

題しらす

17

二三四 あくかれてねぬ夜のちりのつもるまで月にはらはぬ

[学] ふしみに臥をそへたり、此うた小田にふしみの

といふつき所をふしみの小田といひ、庵にねぬ夜の

いふつき所をねぬ夜の庵にといへるは詞のあやにて、

それを対にとりてよめる也、上下のに文字に心をつけ

てみるへし

1 ふしみにうた也ーナシ(野)

2 そへてうた也ーそへたり、これは(乙)

[学] いな葉ふく風に引板をまかせて住庵はの意也、

かく詞をそへて意得へし、月そまことにもありあかしけ

るといへるにて、人のもらぬよしはしられたり

1 引板を風にまかせてー風に引板をまかせて(野)

2 いふ意也ー也(野・乙)

3 千載集とあるー西行の小田山の庵ちかくといふ

歌に合せみるへし(野) 小山田のいほちかく鳴鹿のね

におとろかされておとろかすかな(乙)

4 此歌も格也ーナシ(野) 此歌の結句も引板をな

らしておとろかすかなの意にて、引板といはずしてい

か聞せたる同し格也(乙)

床のさむしろ(四二九)

初句はあり所をかれての意にて、四の句は月故
にはらはぬ也

秋のうた

式子内親王

二三五

秋のいろはまかきにうとくなりゆけど手枕なるゝね

やの月かけ(四三二)

秋のいろは草の花にて、うとくなるはう²つろひ

し故にうとくなる也、うとくなるとなるゝとを
かけ合せたり、手まくらなるゝは手枕になるゝ
なり

秋の御歌の中に

太上天皇

二二六

秋の露やもとにいたく結ふらん長き夜あかすやと

る月かな(四三三)

なかき夜あかすは長き夜もたらすのこゝろなり、

四五一一三とつゝけてみるへし²

千五百番歌合に

「通光卿」

二二七

さらにまたくれをたのめと明にけり月はつれなき秋

〔学〕ナシ

〔野・乙〕月にはらはぬは月故にはらはぬ也

〔学〕ナシ

1 草の花にて―千種の花のいろをいふ(野) 草の花
のいろをいふ(乙)

2 うつろひし故に―うつろひて(野) うつろふ故に
(乙)

〔学〕ナシ

1 たらす―猶たらはず(野) 不足に(乙)

2 (文末に) あくは十分あかすは不足をいふ(野)

〔学〕ナシ

の夜の空(四三四)

四の句月は山にもいらて空にのこるをいふ、四
五一二三のつゝけてみるへし、上句はさらに又
日のくるゝを待てみよと夜は早く明にけりとい
ふ意也

二条院さぬき

一三三八 大かたの秋のねさめの露けくはまた誰袖にありあけ
の月(四三五)

おほかたのはひとゝほりのといふことにて、大²
かたの人のものおもふねさめの袖も露³けき物な
らば又たが袖にやとりて有明の月ならんといふ
意也

五十首歌奉りける時

雅経卿

一三三九 はらひかかねさこそは露のしけからめやとるか月の袖
のせはきに(四三六)

初句ははらひかかねはらひかねてと詞のそはる格¹
にて四の¹⁸句のかもしはかなの意のか也、一³

1 いふ―いふ、さらに又はあらためてまたの意也

(乙) 2 へし―へし、さらにはふたゝひ也(野)

3 さらに又目のくるゝを―又くるゝを(野) 日のく
るゝを(乙) 4 みよと―ふたゝひみよと(野) あ
らためてみよと(乙) 5 夜は早く―ナシ(野) 夜

は(乙) 6 といふ意也―のこゝろ也(野)

(学) ナシ

1 ことにて―意也(野)

2 大かたの人のものおもふ―上句は一通りにものお
もふ人の(野)

3 露けき物ならば―意也 露けくはといふ意也(野)

4 やとりて―やとる(乙)

(学) ナシ

1 初句はく格にて―初句にはらひかかねてといふ詞を
そへてみるへし(野)

2 のか也―也(野・乙)

3 一四五三―いふ意也―はらひかかね袖のせはきに

四五二三とつゝけて四の句月のやとるか詞を次第してみるへし、さこそはかやうにこそその意にて、せはき袖にいやしき身を歎く意あり、つゆのしけからめは露のしけくあれにてうたかふ意にはあらず、くあのつゝめかとなり、らめのつゝめれとなるにてしるへし、はらひかねくして袖のせはきに月のやとることをかやうにこそ露のしけくあれといふ意也

夕鹿といふことを

家隆卿

二四〇 下紅葉かつちる山のゆふしくれぬれてやひとり鹿のなくらん(四三七)

もみちかつちるはもみづればそのまゝすでにちるといふ意なり、ひとり鳴といへるにて妻とふ鹿なることはしられたり

百首奉りける時

入道左大臣

二四一 山おろしに鹿のね高く聞ゆなり尾上の月にさ夜や更ぬる(四三八)

月のやとるかとつゝけて意得へし、二三の句はかやうにてこそ露のしけくあれといふ意也、くあのつゝめかとなりらめのつゝめれとなるにてしるへし(野)

3 一四五三—一五四三(乙)

4 四の句—四の句は(乙)

5 いやしき身を嘆く—述懐の(乙)

6 にてうたかふ意にはあらず—也(乙) 7 ことを

—ことかな(乙)

(字) ナシ

1 すでに—ナシ(野)

(字) 山より吹おろす風にこそ高く聞ゆるといふかあや也、尾上の月はをのへに出たる月をいふ、今いてたる月に夜の更たるといふかあやにて、あやを対にとりたる歌也、上下のものしに心をつけて見るへし

1 奉りける—奉し(字) 2 四の句は尾上に—尾

四五一二三とつゝけてみるへし、²四の句は尾上
 に今いてたる月にて、入月にはあらず、³尾上に
 今いてたる月なるにはや夜の更たりとみえて山
 より吹おろす風に鹿のねの高く聞ゆ也と心のあ
 やを⁵かけ合せたる歌也

寂蓮法師

二四二 野わきせし小野の草ふしあれはてゝみ山に深きさを
 鹿のこゑ(四三九)

草ふしは鹿のふし¹どにて、み山に深きはみ山に
 ふかく入し也、く¹いりし¹のつゝめき¹となるに
 てしるへし

百首歌奉りける時

惟明親王

二四三 み山への松の木末をわたるなりあらしにやとすさを
 鹿の声(四四二)

四五一二三とつゝけてみるへし、⁴あらしの吹に
 つれて松の梢を²鹿のこゑ³のわたるとなり

晩聞鹿といふことを

土御門内大臣

上の月は尾上に(乙) 3 尾上にゝとみえてナシ(乙)
 4 聞ゆ也と聞え、尾上に今いてたる月にはや夜の更
 たるかと(乙) 5 かけ合せたる一對にとりたる(乙)
 (野) 尾上の月は尾上に出たる月をいふ、入月にはあ
 ず、結句は小夜かふけぬるといふに同じ、やをおかにか
 へてみるへし、山より吹おろす風に鹿のねの高く聞え今
 出たる月にはや夜の更ぬるかといふ意にて、上下を対に
 とれるうた也、四五一二三とつゝけて意得へし

(学) ナシ

1 ふしどにてふしど也(野・乙)

(学) ナシ

1 の吹につれてにつれて(野・乙)

2 松の梢を鹿のこゑの鹿のこゑの松の木末を(野)

3 わたるとなりわたり行也(野)わたるとなり(乙)

二四四 我ならぬ人もあはれやまさるらん鹿なく山の秋のゆ

ふくれ (四四三)

四五二二三とつゝけて我ならぬ人もきかばと詞
をそへてみるへし、鹿のなく声に秋の夕くれの
あはれのまされる也

百首歌よみ侍りけるに 撰政太政大臣¹

二四五 たくへくる松のあらしやたゆむらん尾上にかへるさ

を鹿のこゑ (四四四)

たくへくるはあらしの吹さそひくるにて、たゆ
むは風の吹やむをいふ、尾上にかへるはあらし
の吹ぬ前に鳴こゑの聞えし尾上に又鹿のこゑの
かへる也⁴

千五百番歌合に 慈円大僧正

二四六 鳴鹿のこゑにめさめてしのふかなみはてぬ夢の秋の

思ひを (四四五)

一二四五三のつゝけてみるへし、結句は秋のか
なしきおもひをといふ意にて、三の句はたへし

(学) ナシ

1 つゝけて―つゝけてみるへし (野・乙)

2 我ならぬ人もくみるへし―人もの下にきかばといふ詞をそへて意得へし (野)

3 鹿のくまされる也―ナシ (野・乙)

(学) ナシ

1 撰政太政大臣―撰政 (乙)

2 あらしの吹さそひくるにて―あらしにつれてくる也 (野・乙)

3 鳴こゑの聞えし尾上に又―鳴し尾上に (野) なきたる尾上に (乙)

4 也―をいふ (野)

(学) 秋のかなしきおもひをたへしのふの意なり、したふの意はあらず、家つとは誤解也

1 かなしきおもひをといふ意にて―かなしさをといふ意也 (野)

2 三の句はく也―秋のおもひはかなしきものなれはしか聞ゆ、忍ふはたへしのふ也 (野・乙)

のふかなのこゝろ也

題しらす

西行法師¹

二四七

を山田の庵ちかくなく鹿のねにおとろかさされておと

ろかさかな (四四八)

二三の句は手ふりなとして引板もひかぬ故に、

ちかくきて鹿のなくをいふ、おとろかさされては

夢をおとろかさされて也、おとろかすは引板をひ

きて鹿をおとろかす也

百首歌に

慈円大僧正¹

二四八

わきてなと庵もる袖のしをらん稲葉にかきる秋の

風かは (四五三)

四五一二三とつゝけてみるへし、袖のしをるゝ

は露に袖のしをるゝにて、下句は稲葉にかきる

秋の風かは、いな葉にかきりて吹秋の風にはあ

らすといふ意也」²⁰

百首歌奉りける時

寂蓮法師¹

二四九

もの思ふ袖より露やならひけん秋かせふけはたへぬ

〔学〕ナシ

1 西行法師—西行(野)

2 二三の句は手ふりなとして—二の句は手ふりて

(野・乙)

3 引板も—引板を(野)

4 ちかく—庵ちかく(野・乙)

5 きて鹿のなくをいふ—鹿のきて鳴也(野・乙)

6 ひきて—ならして(乙)

〔学〕ナシ

1 慈円大僧正—慈円(野)

2 袖のしをるゝにて—庵もる我袖の露にしをるら

んと詞のそはる格也(野)

3 しをるゝにて—しをるゝをいふ(乙)

〔学〕ナシ

1 寂蓮法師—寂蓮(野)

2 袖にの意にて—袖にといふ意也(野) 袖にの意也(乙)

ものとは (四六九)

袖よりは袖²にの意にて、此こと前にいへり、四³
五一二三とつゝけてみるへし、たへぬは露の秋
風にたへすしてちるをいふ、上句はものおもふ
袖より草葉の露やならひけん¹と詞をそへて意得
へし

秋の御歌の中に

太上天皇

二五〇

露は袖にも思ふころはさそなおくかならず秋のな
らひならねと (四七〇)

四五一二三とつゝけてみるへし、さそなはかや
うにといふ意にて、かならずはあなかちにの意
なり

二五一

野原より露のゆかりを尋ねきてわが衣手に秋風そふ
く (四七一)

露のゆかりは涙¹にて、野原²より秋風が露のゆか
りを「たつねきて又³わが衣手に涙をちらすとい
ふ意也

3 四五ゝ意得へし―草葉の露やと詞をそへてみるへし、たへぬは露のちるをいふ、四五一二三とつゝけて意得へし (野)

4 たへぬはゝ意得へし―一・二の句はものおもふ袖より草葉の露やならひけん¹と詞のそはる格也、たへぬは露の秋風にたへすしてちるをいふ (乙)

(字) ナシ

(野) さそなおくはかやうにおくといふ意也、四五一二三とつゝけてみるへし、かなうずはあなかちといふ意也

(字) ナシ

1 涙にて―涙也 (野・乙)

2 野原ゝ意也―ナシ (野)

3 又わが衣手に―わか袖に (乙)

4 ちらすといふ意也―ちらす也 (乙)

題しらす

西行

二五二 きりくす夜さむに秋のなるままによわるか声の遠

さかりゆく(四七二)

これは秋の夜寒になるまゝにこゑのよわるかと
詞を次第してみるへし、とほさかりゆくは夜寒

になるまゝに鳴よわりたるこゑの遠くきこゆる

をいふ

五十首歌に

家隆卿

二五三 むしのねも長き夜あかぬふる里に猶おもひそふ秋か

せそふく(四七三)

上句は虫のねも長き夜を鳴たらすと聞ゆる故郷

なるにの意也、四の句はそのうへに猶おもひそ

ふと詞をそへてみるへし、三の句のにもしはな

るにの意也

百首歌の中に

式子内親王²¹

二五四 あともなき庭の浅茅にむすほれ露のそこなる松む

しの声(四七四)

〔学〕 ナシ

1 これは―ナシ(野)

2 みるへし―意得へし(野)

3 夜寒に―よわりたる―鳴よわりて(野・乙)

4 をいふ―也(乙)

〔学〕 ナシ

〔野〕 五の句松風とある本はわろし、上句は虫のねも
猶長きよをたらはずとなくふる里なるにといふ意也

〔乙〕 結句松風とある本はわろし、上句はむしのねも
この長き夜をたらすと鳴ふるさとなるにのこゝろ也

〔学〕 あともなきといひて人のとはぬよしをおもはせ
たり、三ノ句は松むしのこゑのむすほるにて人を待
よはりたるつまなり、三ノ句の下にむすほれてとい
ふ詞をそへて意得へし、むすほれむすほれてと詞
のかさなりて下へつゝ格也、家つとの難はあたらす、

まつ虫は人まつむしにて、¹あともなきは人のこ
 しあともなき也、二の句のにもしはなるにの意³
 にて、むすほゝれは鳴よわりてこゑのみたるゝ
 をいふ、此句の下にむすほゝれといふ詞をそへ
 てみるへし、露のそこなるはつゆのそこにある⁴
 也、にあのつゝめなとなるにてしるへし

慈円大僧正

二五五 衣うつおとはまくらにすかはらやふしみの夢をいく
 夜のこしつ（四七六）

おとは枕にするといひかけて、ふし見にふして
 みるをそへたり、いく夜のこしつはいく夜のこ
 しつらん也、つらんのつゝめつとなるにてし
 るへし

千五百番歌合に

¹ 公経卿

二五六 衣うつみ山の庵のしはくもしらぬ夢路にむすふ手
 まくら（四七七）

本歌草まくら夕風さむくなりけり衣うつなる

ねやの上にかたえさしおほひそともなる葉ひろる柏にあ
 られふる也、是も同じ格にて、能因の歌なり。

1 にて一也（野・乙）（この文野は文末にあり）

2 あともなき也一あともなきといへるにて人のこ

ぬことはしられたり（野・乙）

3 意にて一意也（野）

4 みるへし一意得へし（野）

〔学〕ナシ

1 そへたり一かねたり（野）

〔学〕宿かたるみ山の庵のきぬたのおとしはく夢
 をさまされては又むすふ意也、しらぬ夢路といふに心
 をつくへし、夢にさへしらぬ山路に枕をむすふといふ
 意にて、旅なることはおのつからしれたり

1 公経卿一権中納言公経（学）

（野）ころもをうつはみ山の庵にてうつ也、柴の庵を

宿やかからまし、²これは此歌の後をよめる意にて、
 衣うつ宿をかりたる也、³三の句の下にめのさめ
 てはといふ詞をそへて、しはくものもしを
 四の句の下におきかへて意得へし、しらぬ夢路
 にも枕をむすふといへるにて、しらぬ山路に草
 枕を結びたることは聞えたり、⁴二三の句は柴の
 の庵をうちかへして庵のしはとしはくへいひ
 かけたり

月下掃衣といふことを 撰政太政大臣

二五七 さとはあれて月やあらぬとうらみても誰あさちふに
 衣うつらん(四七八)

本歌月やあらぬ春やむかしの春ならぬ云々、²
 の本歌の月やあらぬといふ句の意をかへてとれ
 り、³月はむかしの²²月にあらすと、いふ意也、
⁴三の句のもしはそへたるもにて意はなし、⁵四
 の句のあさちふの宿にと詞をそへてみるへし

宮内卿

打かへして庵のしはといひかけたり、しはくものも、
 しを四の句の下におきかへてみるへし、しらぬ夢路に
 も枕をむすふといひて、しらぬ山路に枕をむすひたる
 ことを聞せたり、しはくの下にさめてはといふ詞を
 そへて意得へし

2 これは一ナシ(乙)

3 三の句くそへて一柴の庵をうちかへして庵の柴と
 いひかけたり(乙)

4 二三の句くいひかけたりしはくの下にさめて
 はといふ詞をそへてみるへし(乙)

(字) ナシ

1 春ならぬ一ナシ(乙) 2 この本歌のくとれり一

ナシ(野) 此うたの月やあらぬといへる詞をとれり(乙)

3 月はく意也一二の句月やむかしの月にあらぬと、
 詞をそへて意得へし(野) ナシ(乙) 4 三の句くなし
 一月やのやはくろのうらへかへるや也、うらみてもの
 もしに心はなし、そへたるもし也(野) 三ノ句のも、
 しにこころはなし(乙) 5 四の句くみるへし一浅ち
 ふにはあさちふの宿にの意也、のやとにのつゝめにとな
 るにてしるへし(野) 5 四の句一ナシ(乙)

二五八 まとるまでなかもよとてのすさひかなあさのさ衣月

にうつこゑ(四七九)

四五一二三とつゝけてみるへし、すさひはしわ

さといふ意²にきこえたり、常³にいふとはこと也

千五百番歌合に

定家卿

二五九 秋とたにわすれんと思ふ月かけをさもあやにくにう

つ衣かな(四八〇)

あやにくはいぢわるくといふ意にて、三の句の

もじはなるものをの意也、せめて秋といふこと

をなりともわすれてみんと思ふ月かけなる物を

さもあやにくに衣をうつおとのきこえてうき秋

といふことのわすら「れぬことかなといふこゝ

ろ也

擣衣の心を

雅経卿

二六〇 みよし野の山の秋かせさよ更てふるさとさむく衣う

つ也(四八三)

ふけてに吹てをそへたり、¹けときはかよふ²にて

(学) ナシ

1 しわさとこゝにてはしわさと(乙)

2 意にきこえたり―意也(野)

3 常にこと也―ナシ(野) 四五一二三とつゝけてみるへし(乙)

(学) ナシ

(野・乙) 上句は秋といふことをなりともわすれてみはやと思ふ月かけなるものをの意(にて・乙) 下句はさもあやにくにころもをうつおとの聞ゆることかな、さるからに秋といふことも(をえ) わすられすといふ意也、(さも・乙) あやにくにはいちわるくといふこと(意・乙)也

(学) ナシ

1 そへたり―かねたり(野・乙)

2 かよふにてしるへし―通す也(野) かよへり(乙)

3 夜の―小夜(野)

4 ふもとの―ナシ(野) また(乙)

しるへし、寒くといへるに感情あり、夜のふけてよし野山には秋風のふく声が聞えふもとのふるさとは又衣をうつおとがさむきこゆるといふ意也

式子内親王

二六一 千たひうつきぬたのおとに夢さめて物おもふ袖の露

そくたくる (四八四)

露は涙にて、くたくるはなみたのしけくおつるなり、うつとあるにむかへてくたくるとはいへり

百首歌奉りける時

23

二六二 更にけり山のはちかく月さえてとほちの里に衣うつ

こゑ (四八五)

1 初句夜は更にけりと詞をそへて、二三四五一とつゝけてみるへし、をとほをかよはして十市へ遠といひかけたり、古今集の歌に、しほの山さしての磯になく千鳥云、此しほの山ももと越

5 又一ナシ (乙) 6 おとが一音の (野) おとの (乙)

(学) ナシ

(野) うつとくたくるとかけ合せてみるへし

(乙) 初句は結句にかけあへり、袖の露は涙にてつゆそくたくるは露のあまたちるをいふ

(学) ナシ

1 初句くみるへし—二三四五一とつゝけてみるへし (野) 二三四五一とつゝけて、初句夜はふけにけりと詞をそへてみるへし (乙) 2 をとくかけたり—十市へ遠といひかけ玉へり、十はとをにて遠はとほ也、をとほをかよはしてよめる儀は (野) 十市へ遠といひかけて十はとを遠はとほなれとかなのたかへるにはあらず、をとほをかよはしたる也 (乙) 3 古今集の歌に—古くもあり (野) 4 此—ナシ (野) 5

前の志乎能山なれと、さしての磯の縁にしほと
はいへるにて同じ格也、かなたかひにはあらず、
山のは近くと十市の里をかけ合せたり

百首歌奉りける時

定家卿

二六三
ひとりぬる山鳥の尾のしたりをに霜おきまよふ床の
月かけ(四八七)

霜おきまよふは霜おくらんといふ詞のくらん
をくとつゝめて又くをきまよふとのへたる詞
也、ひとりぬる山鳥の尾のしたり尾に霜のおく
らん床のつきかけはいかに」さむからんと我身
にあてゝおもひやりたる意也

月五十首歌に

寂蓮法師

二六四
人めみし野へのけしきはうら枯て露のよすかにやと
る月かな(四八八)

露のよすかは露のより所といふ意にて、露のよ
り所は草葉也、人の花をみにきてにきはひしあ
きの野も今はうら枯て露のおきたる草葉にさひ

越前のくなれと—もとしをの山なるを(野・乙) 6
磯の縁に—縁に(野) 磯といへる縁に(乙) 7 は
いへるにて同じ格也—ををほにかよはしている也(野)
8 かなたく合せたり—ナシ(野・乙)

(学) 霜おきまよふはしものおくとみゆるにて、床の
月かけを山鳥の尾におく霜と見たるよし也、此集の冬
の部の、我門のかり田のおもにふす鳴のとこあらはな
るる冬のよの月といふ夜も同じ趣なり

1 定家卿—定家朝臣(学) 2 おくらん—おく

(野・乙) 3 詞のく詞也—ことにて、まよふはま

よふらん也、ふらんのつゝめふとなるにてしるへし

(野・乙) 4 したり尾に—尾に(野・乙) 5

いかに—さそ(野) 6 我身にあてゝ—山鳥を(野・

乙) 7 やりたる意也—やりてよめる意也(乙)

(学) 家つとによすかは因縁なり、露を縁として月の
やとる也といはれたるはいかゝ、露のよすかは露のよ
り所にて、露のより所は草葉也、くさ葉に月のやとる
とはいへるなり

1 寂蓮法師—寂蓮(野)

(野) 上句は人のみにこし秋の野のけしきはうら枯て

しく月のやとることかなといふ意也

五十首歌奉りける時

二六五 むら雨の露もまたひぬ槇の葉に霧たちのほる秋の夕

くれ (四九一)

三の句のもしはなるにの意にて、四の句へは
つゞかず、むら雨ははれてまだ露もかわかぬ槇
のはなるに、又そらに霧³のたちのほりて雨のふ
らんとする秋の夕くれの²⁴けしきはいと⁴々さ
ひしき⁵こと也といふ意也

(二の巻未完)

也、下句は草葉の露にさひしく宿る月かなといふ意なり、露のよすかは露のより所にて草葉をいふ

2 といふ意―ナシ (乙) 3 花をみにきてにきは

ひし―花見にこし (乙) 4 露のおきたる草葉に―

草葉の露に (乙)

1 四の句へはつゞかず―此句にて切たり (野) 此

句にて切てみるへし (乙)

2 はれて―はれたれと (野)

3 そらに―ナシ (野)

4 いと―ナシ (野)

5 こと也―けしき也 (乙)